



宇部市立図書館 リニューアル市民委員会 開催報告書

第3回リニューアル市民委員会

日付:2022年11月12日(土)

時間:9:30-12:00

会場:宇部市立図書館 2F 講座室

目次

実施概要	2
日時	2
場所	2
参加人数	2
プログラム	2
要約	2
テーマ別ディスカッション	3
宇部市立図書館基本構想の振り返り	3
① 「知りたい」「学びたい」を支える情報収集・発信拠点	4
② ひとやまちとの新たな交流と創造を生み出す場	5
③ 子どもから大人まで誰もが自分らしさを表現できる居場所	7
考察	9
記録写真	10

実施概要

日時

2022年11月12日(土) 9:30-12:00

場所

宇部市立図書館講座室、オンライン

参加人数

合計19名（会場参加:17名、オンライン参加:2名）

プログラム

1. オリエンテーション(リニューアル基本計画の検討進捗の共有)
2. 第2回市民委員会の振り返り・共有
3. テーマ別ディスカッション(前半)
4. 休憩
5. テーマ別ディスカッション(後半)
6. 発表
7. おわりの挨拶

要約

宇部市立図書館リニューアル基本計画(以下、基本計画)策定に向けた3回目のリニューアル市民委員会(以下、市民委員会)として、第2回目のリニューアル市民委員会より行っているテーマ別ディスカッションに重点を置いて実施した。委員が十分に議論をつくせるよう考慮し、また第2回目のディスカッションの様子も事前に共有したことで、一層深まった議論が繰り広げられた。

最終回である第3回目の市民委員会におけるポイントは、委員の多くが図書館と密接に関わり、主体的に行動を起こしていきたい思いを持っている様子がうかがえた点である。ディスカッション内での具体的な提案についても、「図書館を通じて司書や市民につながりたい」、「図書館を通じて自己表現や自己実現をしたい」、「図書館の活動を一緒に考えたい」という趣旨の発言が多く寄せられた。

図書館における市民協働・対話の場は「UBE ライブラリーラボ」の活動に接続していくことを、前回の市民委員会で説明したこともあり、リニューアルに向けた具体的な議論も行われた。より連携しあう市民協働の実現に向けて、ハード・ソフトともにリニューアルでどのように反映できると望ましいか意見が交わされた。

テーマ別ディスカッション

前回の第2回市民委員会と同様、基本構想のビジョンにつながるコンセプトに、第1回市民委員会が出た意見をマッピングさせ、3つのコンセプトをディスカッション用のテーマとして設定した。委員は、3つのテーマのうち、原則として前回選んだものとは異なるテーマを選んだうえで、90分間でテーマに関連する現状の課題や今後の提案を集中的な議論を行なった。これによって、委員1名につき、3つのテーマのうち2つのテーマについて議論でき、テーマに対する委員の多様な視点を取り入れることができた。

なお、各グループにはファシリテーターと図書館職員が同席し、委員同士のディスカッションをサポートしつつ、委員からの質問に対する回答や情報提供等を行いながら議論に参加した。

宇部市立図書館基本構想の振り返り

<リニューアルのビジョン>

知識や情報が循環する新しい読書環境の創造
ひととまちがつながり自己成長・表現できる、まちなかの居場所

<ビジョンにつながるコンセプト>

(うち、テーマ別ディスカッションは①-③について)

- ① 「知りたい」「学びたい」を支える情報収集・発信拠点
- ② ひとやまちとの新たな交流と創造を生み出す場
- ③ 子どもから大人まで誰もが自分らしさを表現できる居場所
- ④ これからのまちづくりを共に考える「現代版・宇部方式」の実践

① 「知りたい」「学びたい」を支える情報収集・発信拠点

<テーマ別ディスカッションのポイント>

(自ら情報を発信し、外部サービスと連携する図書館へ)

図書館に来て使ってもらうだけではなく、図書館に来ない・来られない多くの市民に向けて積極的な情報発信をしていくことが欠かせない。図書館が作成している図書館だよりだけではなく、市全体の広報や民間メディアや SNS 等の活用計画を立て、図書館での活動や読書に関する多様な情報を発信ができる施設運営を目指す。あわせて、まちかどブックコーナー等の外部サービスとの連携を強化し、まちなか全体で読書や知識に触れられる仕組みを検討する。

<議論であがった課題と提案>

課題 1 「図書館の情報発信力の改善」

- 図書館でやっている活動が市民に届いていない
 - パンフレット等の図書館に来なければ手にとれない情報はあまり意味がない
 - 広報うべに毎月の児童サービスに関するイベント情報しか載っていない。大人の一般市民に対する図書館情報が載っていない
- 図書館だよりが市民の手に届いていない、目にしたことがない
- 図書館の公式ウェブサイトが見づらい、イベント情報も探づらい
- 図書館に所蔵されている貴重な資料や宇部市に寄贈された資料はまちの宝物であるはずなのに、アピールされていない

課題 1 に対する提案

- オンラインでの図書館の情報発信を推進する(SNS 等)
 - 図書館で起こったイベントをリアルタイムで発信していく
 - 今日あったことを今日発信(今日のお話会はこうでした等)
- 広報うべに図書館コーナーをつくり、図書館に関する情報を広く伝える
- 宇部日報等の民間メディアと連携した情報発信を行う
- 図書館まで来なくても、近くを通りがかったときに掲示板等でいまなにが行われているかをわかりやすく掲示する
- 市営バスのなかで図書館をアピールする等、まちなかで図書館をもっと PR する
- FM きららに図書館として出演し、図書館のアピールをする
- 図書館や市がもっている貴重な資料をうまく特集展示等で企画し市民向けに発信する

課題 2 「図書館以外の拠点機能の検討・活用」

- 市内の中心に宇部市立図書館、楠地域に学びの森くすのきがあるが、東岐波からくるとなると少し遠い
- まちかどブックコーナーが使いづらい、市民に浸透していない

課題 2 に対する提案

- 東岐波エリアの市民が利用しやすいあり方を検討する(分館設置、移動図書館車、配本サービス等の活用)
- まちかどブックコーナーの利用条件を見直す
 - 貸出して持ち帰って読めるようにする(その場だけで読むのは難しい)
 - 図書館から借りた本をまちかどブックコーナーで返却する
- まちかどブックコーナーを PR する

課題 3 「市民とのコミュニケーションを積み重ねられる図書館職員の配置」

- 正規職員は図書館の専門知識がなく、3、5 年で異動になるため、積み重ねたコミュニケーションが0に戻ってしまう
- 長く勤めている司書は会計年度任用職員であり、非常に不安定な立場
- 経験のある知識をもった職員が長く図書館に居てもらうことが重要

課題 3 に対する提案

- 会計年度任用職員が長く働き続けられるような仕組みを検討する
- 図書館に長く勤めている会計年度任用職員の方々の知識・経験をもとにした図書館の情報発信が非常に重要
- 図書館をよりよくしていくためにも、利用者と信頼関係や築けて相談しやすい安心感を与えられる職員が常にいてほしい

② ひとやまちとの新たな交流と創造を生み出す場

<テーマ別ディスカッションのポイント>

(多様な市民活動・図書館活動が見える開放的な空間づくり)

芝生や展示室、講座室等のさまざまな場所で実施される多様な市民による活動や図書館による活動が、より目につきやすく、入りやすい工夫がなされることによって、「図書館でこんなことができるんだ」「こんな体験ができるんだ」という思いを持つことができる。図書館が交流や創造の場となるために、気づきと発見が生まれる仕掛けづくり・場づくりが重要となる。

<議論であがった課題と提案>

課題 1 「閉鎖的で入りづらい空間との連携」

- 展示室は、せっかく面白そうな企画をしても、入りづらい雰囲気がある、敷居が高い
- 2 階は、企画や催し事があっても、2 階にあがろうという気になりにくい
- 中庭は、気持ちがいい空間となっているのに、図書館サービスとつながっていない
- 参考資料室は、入りにくいし暗い。入口で座っている人がいると、静かにしないといけないよう緊張する

- 館内全体は、交流や創造を生み出すためのゾーニングの工夫が重要

課題 1 に対する提案

- 展示室
 - ガラス張りで外からも活動が見えやすくなることで、図書館ってそんなこともできるんだ！と思える場所になるといい
 - 閉塞的なものをなくす
 - 展示に限らず料理や読み聞かせ等、多目的に使える展示室になるといい
 - 多目的な利用もできつつ、しっかりとした展示も両方できるといい
 - デジタル機能も活用した高度な展示機能を備える
- 中庭
 - 芝生に座れるような備品(ラグやローチェア)等を用意する
 - 芝生で読書ができる、お話し会等のイベントを実施する
- 参考資料室
 - ゾーンやコーナー等で区切って、勉強・研究・読書・ゆっくり過ごす等のそれぞれの利用者が目的に沿った利用をしやすい工夫をする
- 館内全体
 - 来館目的が異なる人たちとのゾーニングを整理する(読書中心、学習・作業中心等)
 - ふらっと訪れた人でも過ごしやすいオープンな場・フリースペースを設ける

課題 2 「オフライン・オンラインでの図書館ネットワークづくり」

- 図書館に近い人だけではなく遠い人にも図書館サービスを届ける必要がある
- お話し会に参加したいけど、来られない人が多い
- 交流・創造を生み出すためのネットワークハブ的な機能が重要
- 気軽に本や読書の相談できる場所がほしい(レファレンスカウンターには行きづらい)
- もっと図書館に関わりたいとの思いをもった市民のネットワークづくり

課題 2 に対する提案

- インターネットを活用したオンライン読み聞かせの実施
 - ふれあいセンターとビデオ会議をつないで、誰もが自分の校区でお話が聞ける
- 図書館を通じたコミュニティ形成・市民と図書館のコミュニケーションを支援するライブラリーコミュニティコンシェルジュを設置する
- 絵本好きなネットワーク等のさまざまな角度からの市民ネットワークを形成し、生涯学習を通じた出会いと交流の場をつくる
- UBE ライブラリーラボと連携して気軽な市民相談や市民連携を受け入れられる場をつくる
- まちとの回遊性やネットワークづくりを意識する

③ 子どもから大人まで誰もが自分らしさを表現できる居場所

<テーマ別ディスカッションのポイント>

(自分らしさとの出会い・発見する経験づくり)

子どもも大人も、学校や仕事といった日々の生活で慌ただしく過ごしてしまいがちな現代の暮らしがある。そういった時間のなかで、そもそも自分らしさに気づけていないのではないか、という仮説が立ち上がった。

図書館は、そういった日常の忙しなさから一歩距離を置いて過ごせ、自分自身を見つめ直す時間を大切にする場として足を運べるとよい。また、自らの自分らしさに出会い、自分らしさを発見するためにも、自分以外の他者との交流や自分が関心をもっていなかった新しい知識・情報の出会いや体験を意識的に作り出すような場になるよう、ソフト・ハードの両面からの仕掛けづくりが重要な役割として求められる。

<議論であがった課題と提案>

課題1 「現在の多くの宇部市民にとって図書館に来るきっかけがない」

- いまの図書館に来ている宇部市民の大人は一定層の市民だけ
 - その他の多くの市民は図書館に来る習慣がない
 - 来たくても仕事の時間と、開館時間があわないため来られない
 - 日々の暮らしや仕事で疲れきっているため、そこから図書館には足が向かない
- 大人だけでなく、子どもたちもとても忙しい(部活・クラブ、習い事、塾等)
 - 学校が終わってから図書館に来られるのは、図書館の近隣の子どもたちだけ
 - 大人と一緒になければ来られない子どもも多い
 - 大人の都合があわないと、子どもも図書館に来ることができなくなる
 - 大人が子どもと一緒にでも来館しやすくなる工夫が必要
- 民間の電子書籍サービスや書店は利用するが、図書館は利用しない
 - 本の貸出・返却が手間
 - 棚がつまらない、いつ来ても同じ・変化がないように見える
 - 書店の中を歩くワクワク感が図書館では感じられない

課題1 に対する提案

- 仕事や学校が終わった後の大人と子どもを対象に、夜間の開館・イベントを行う
 - これまで図書館に来たことが無い市民に、来館するきっかけをつくる
 - たとえば、金曜日の夜であれば比較的時間にゆとりがある
 - リラックスして一人で過ごしたり、親子連れで来館できたりといった企画をする
- 施設の一部だけ夜間でも入れるような工夫をする
 - 予約の貸出や返却を閉館後の一定時間まで受け付けられるようにする
- 本の並べ方、本棚のレイアウト、書架サイン等を工夫して、思わず注目してしまう棚作りを行う
- 図書館だからこそできること(電子書籍サービスや書店ではやっていないこと)の特徴や魅力を周知する

課題2 「誰もが自分らしさを表現できるほど、自分の自分らしさを知らない」

- 自分らしさは自分だけでは気づかないし、自分から自然に出てくるものではない
 - 自分以外の外的なものに対する素直な反応によって、自分らしさに気づける
 - なにかの事象に対してどう反応するかが、その人らしさが現れる
 - 本棚の構成や館内の展示、イベント、他者との交流といったさまざまなきっかけを通して、自分らしさが徐々に立ち上がっていく・形成されていく
 - 「検索」は自分の内的な動機の範囲のみになりがちのため、自分らしさの幅も狭まってしまうおそれがある
 - 「検索」だけではなく、それ以外の手段でも自分以外の外的な情報や人やコトに出会える場が重要
- 自分らしさや個性を無くすような社会の仕組みがある
 - 学校や職場では、自分らしくいられないことも多い

課題2 に対する提案

- 自分らしさに気づき、出会えるような幅広く多様な機会を本や情報を通して生み出す
 - どんな市民も自分らしくいられるための余白がある空間をつくる
 - なにか表現している・発表している人の様子に自然とふれることができる
 - イベントしていたり、会議をしていたり、展示をしていたりといった、さまざまな人のさまざまな活動の場を当たり前を目にして受け入れられる
 - (参考)八戸市美術館「ジャイアントルーム」
<https://hachinohe-art-museum.jp/>



(以下、公式ウェブサイトより抜粋)

教える人と学ぶ人が同じ場を共有でき、可動間仕切りや家具で自在に場所をつくることであらゆる活動を可能とする「ジャイアントルーム」

- 宇部で育つ子どもたちが、社会に出る前にたくさん外的なものに触れて反応することで、自分らしさに気がつく体験ができる
 - 宇部市の子どもがさまざまな大人に出会うことで、宇部市で暮らし生きることのロールモデルとなれる
 - 宇部市に集まる多様なアーティストと出会い、交流できる
 - ▶ (参考)宇部市 - アーティスト・イン・レジデンス
<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/kyouyou/bunka/1004771.html>

考察

第2回から継続するテーマ別ディスカッションでは、第2回で選んだテーマと別のテーマを選び、新しいグループメンバー構成によって議論を行なったことで、前回の議論を引き継ぎつつも、新しい視点での意見が交わされた。

メンバーを変えても第2回と似た議論が交わされる様子も見られた(図書館の情報発信に関する議論や閉鎖的で入りづらい空間の利用方針に対する議論等)。このような議題は、より注目が集まり市民視点で課題が多くある点だと認識されていることを表している。これらの項目については、基本計画内で今後の方針を整理し提示することが求められる。

ディスカッションを通して、繰り返し委員から聞かれた「今後も図書館と関わりたい」という思いを受けとめ、UBE ライブラリーラボの活動が動き出すことは図書館にとっても非常に大きな出来事となった。今後のリニューアルに向けて、図書館とUBE ライブラリーラボがお互いに対等な立場で情報を共有し、相談しあえる関係をつくることが今後の重要な取り組みとなる。リニューアルに向けて市民の声を代弁し、図書館と相談しあえる場としてUBE ライブラリーラボが機能することで、市民のためのリニューアル事業が進むとともに、基本計画を核とした具体的なサービス計画にも市民の声を反映させながら検討していく過程が必要である。

記録写真

